

徒然なるままにて遊び綴る

# 風遊戯

神秘学ポエジー

第3集

2014/6/19 ~ 2014/8/31

神秘学遊戯団

結詞	往還	ぼやき	同期	発見法	戦い	線	変化	振り子	さかさま	世界劇場	ふろしき	シャバ	軽口	仮面舞踏会	公案	橋	歴史	沈黙	めぐり	彷徨	ことのは	扉	船出	永遠の少年	目次
六七	六五	六三	六一	五八	五五	五三	五〇	四八	四六	四三	四〇	三六	三三	三一	二九	二六	二三	二〇	一七	一五	一一	八	五	二	

《永遠の少年》

どんなことも  
はじめから

ひとつひとつ  
新しいまま

考えるのは  
いつもいま

かたちはいま  
つくられている

知ることは  
知らないこと

先が見えたら  
忘れてしまおう

生きることは  
いつも新しい

教えられても  
おぼえない

教えることも  
なにもない

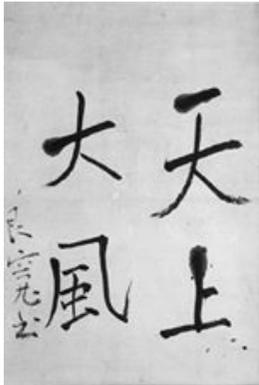
あたまのなかは  
いつもからっぽ

ぼくのなかの永遠の少年よ  
忘れることはいいことだ

あたまのなかの大空を  
吹きぬける風になって遊べ

☆風遊戯《永遠の少年》ノート

◎イメージするのは、良寛の書「天上大風」。



◎成熟という名には、ふたつの対極があつて、嫌な成熟のほうは過去の堆積や経験でがんじがらめになっている、世慣れた成熟。もうひとつの成熟（だとぼくが思っているのは、知っていることをすべて忘れてもそこにたしかにある魂の形としてある成熟。成熟という名前は似つかわしくないのかもしれないけれど。

◎人は過去にしばられている。ぼくはかつて数学が好きだったことがあったのだけれど、その理由は、いつも最初から考えることができたからだ。そしてそれがあつた体系のなかで証明できたりする。証明なんて正直いってどうでもよかったのだけれど、自分で一から考えることができるということが喜びだった。だから、公式などは一切記憶しないで、自分でなんでも公式をつくることができることがうれしかった。もちろん、数式のなかに数を代入して答えをだすようなことを数学だとは思えなかった。

◎しかし、人は多く過去にはかりしばられている。それは同時に、結果にしばられているということでもある。知識というのもそのひとつだ。「そういうものだ」という過去の亡霊のようなものもあつて、どこからやってくるのかわからないままに、理由もわからずひとを縛り付けていく。

◎もちろん、すでにぼくもたくさんのもに縛られすぎて身動きがとれなくなっているのだけれど、理想としては、大空を吹きぬける風のようになつて、あらゆる過去の呪縛からのがれて、そしてもちろん、未来という過去の投影からも自由になつて、遊び続けたいと思う。それを「永遠の少年」と表現してみました。たまにはこういうのもいいだろうと。

◎今回のテーマを書くことになったきっかけは、河本英夫『くわたし』の哲学／オートポイエーシス入門』（角川選書／平成26年5月25日）。「日々新たな自己になること」について、「少年」というコンセプトで、寺田寅彦、マティス、坂口安吾がとりあげられ、「人間が秘める力を最大限に発揮し、新たな能力を形成する」ものとしてオートポイエーシス理論が新たな切り口から紹介されているとてもスリリングな本。

◎この本の「あとがき」から。「オートポイエーシスは、新たに経験のプロセスを経て、新たに自分自身の経験を拡張し、それによって気が付いたときには新たな自分が形成されている仕組みであり、そうした経験の仕方を示したものである。その意味で、つねに哲学の課題となっているものを経験科学や芸術的制作に接点があるようにリセットしてある。その意味で、こうした試みは、哲学のひとつの「ゆぐえ」を示している、と考えている。」

《船出》

漕ぎだすんだ  
ちっぽけなカヌー  
ぼくの宇宙船で

星の音楽の祝福するなか  
まだ見ぬ彼方めざして  
冒険はいつもはじまったばかりだ

彼方にはその彼方があるから  
目的地は決めないでいよう  
ぼくにはいつも  
あたらしいぼくがいるから

声高らかに歌うんだ  
ちっぽけなカヌーの歌を  
オールの動きにあわせ  
風のドラムを鳴らしながら  
ぼくのリズムを  
流れる水のダンスに乗せて

天の河を泳ぐという  
星の魚を知ってるかい  
魚のなかで静かに輝いている  
光るコトバのことを

夢でみたんだ  
星の海に乗りだし  
航海を続ける小さな舟のまわりを  
踊るように回遊する魚の  
七色に光るコトバのこと

そして夢のなかのぼくも  
不思議な幾何学模様をした  
そのコトバとなって歌っていたことを

漕ぎだすんだ

ちっぽけなカヌーで

風と水

火と地の呪文で織りなされた

魔法のマントを友として

彼方の彼方へ

もうひとりのぼくの歌う

光るコトバを探して

☆風遊戯《船出》ノート

◎ケネス・ブラウアーの『宇宙船とカヌー』がヤマケイ文庫で復刊している。手元にあるのは1988年のちくま文庫版。内容はほとんど忘れてしまっているが、巨大な宇宙船の建造を夢見ていた物理学者のフリーマン・ダイソンと海を航海する巨大なカヌーの建造を夢見ていたその息子、ジョージ・ダイソンの伝記。そういえば、ぼくの名前はその息子と同じだ。今回のポエジーのモチーフの一部はそこから来ているが、とくにその内容と関連はしていない、と思う。無意識のなかでは知らないけれど。

◎夢で見たことはないだろうか。自分が今の自分にはわからない言葉で話していることを。そしてその言葉が不思議な叡智に満ちていたりすることを。夢から覚めて、その言葉とその言葉で話されていたことをとともも知りたいと切に思うのだけれど、どうしてもそれが思い出せないでいる。

◎思い出せないで、ああだったのではないか、こうだったのではないか、いろいろな考えはじめ、いろんな本を読んだりもするのだけれど、ときにふとどこかでそれが垣間見えるときがあったりする。何重にもヴェールのかけられた向こうにある言葉なのだけれど、それがどこかで光っているのが見えたような。

◎そうした光るコトバは、音楽のなかに見つかったように感じたり、絵画のなかに見つかったように感じたり、詩のなかに見つかったように感じたり、もちろん宗教的・神祕学的な叡智のなかに感じたりすることがある。ある意味で、それらを探してぼくは、日々旅しているようなものかもしれない。日常はかぎりな

く俗的であまりにつらいけれど、でもその俗のなかでしか得ることのできないようなその旅の果てには、たぶんもうひとりのまだ見ぬ自分がいて、そのまだ見ぬ自分こそが自分にその光るコトバを歌ってくれるのかもしれない。そんなことを思いながら・・・。

◎ちなみに、小さな舟での船出のイメージとタイトルは、「船出していく小さな舟よ・・・」ではじまる、大貫妙子の「船出」という歌から（アルバム『One Fine Day』所収）。

《扉》

くるくるくねくね行き止まり

袋小路に藪小路

雨に降られて陽にさらされて

歩き疲れて眠って起きて

悪態ついて自分に泣いて

迷路をぐるぐるたどっては

どこにいるのかわからぬままに

往くも帰るもままならず

やがて自分も忘れはて

どこへ往くやら帰るやら

空をながめてふと思う

上から見ればこの自分

いったいどこにいるのだろう

鳥にはなれず飛べないけれど

自分を超える道はある！

気づけば鍵が手のなかに

袋小路を出る鍵か

「扉はおまえのなかにある」

書かれた言葉を見つめては

自分の扉を考える

自分のなかの扉とは？

悩みはじめて時は過ぎ

自分のなかのそのまた自分

さがして迷いその果てに

見えてくるのは胸の奥

胸の扉のその奥に  
しまっておいた闇の種  
自分を閉ざし誤魔化して  
見ないふりした闇の種  
迷路のなかに置き去りに  
扉をあけて手をのべて  
光をあてて水をやり  
育ちはじめた闇の種  
芽を出し育ち光に満ちて  
空へ空へと舞いあがる  
やがて迷路が見えてくる  
袋小路に藪小路  
くるくるくねくね迷路の世界  
たどって泣いて笑って泣いて  
扉にそつとくちづける

☆風遊戯《扉》ノート

◎堂々めぐりのような迷路の感じをだしてみようと、七五調・七七調で書いてみることに。イメージとしては、シューベルトの歌曲「糸を紡ぐグレートヒェン」でしようか。糸を紡ぐようにぐるぐるすると迷路に行く。

◎バーバラ・ボニーの歌で。  
詩はゲーテで、『ファウスト第一部』が出典。  
最初のところは、こんな歌詞です。

Meine Ruh ist hin,  
Mein Herz ist schwer,  
Ich finde sie nimmer  
Und nimmermehr.

私の安らぎはなくなり  
心は重い  
もはやもう  
決して憩いを見出せない

この歌曲の終わりのところに「口付けをしたい／私の望むままに・・・」というのがあって、それとは違う意味で「くちづけ」でしめくくすることにしました。

<http://www.youtube.com/watch?v=w90jpyjsals>

◎ひとは自分が迷路のなかや袋小路にいることに気づかないで生きている。いうまでもなく、迷路や袋小路は自分で選びつくりだしたものだ。それはまるで偶然のようにやってくるが、なぜやってくるのかわからないままで。

◎いずれその迷路に向き合わなければならないときはきつとくる。扉はいつも目の前にあり、その鍵も自分の手のなかにあるのだけれど、それに気づき、実際に扉に向き合いそれを開くに至るまでにはそれなりのプロセスが必要になる。

◎こんな面倒くさいことをひとは繰り返しながら生きているんだなあと、年を経るほどに実感させられることが多い。でも、自分の閉ざした扉やその扉の奥に置き去りにしてしまったさまざまなもの解き放つことができたときの、慈しみというのはちょっと言葉にはならないかもしれない。そして、そういう迷路のような生を生きることが、ひよっとしたらその慈しみを得るためなのかもしれないと思うことがある。光と闇の物語。それは、光を見るための、闇の供犠なのかもしれない。光そのものは見ることができず、それを反射するものが必要だから。

《ことのは》

ことば

ことのは

かぜさそふ

しずかに

さやぎ

かなでゆく

あらしになれば

ことのは

あれて

あちらこちらと

きがふれ

よごみ

あちらこちらと

よごませ

ちらし

ちぎれてとんで

こわれて

しずみ

あれてみだれて

はてなく

さけび

やみの

ちからは

ことのはに

くろい  
ちからを  
そだてゆく

ことば  
ことのは  
ひかりのなかで

ただただ  
しずかに  
ほほえめば

こころの  
みみは  
ひらかれて

やみの  
ちからも  
かわりゆく

ことば  
ことのは  
そよそよと

ことば  
ことのは  
かぜさそふ

## ☆風遊戯《ことのは》ノート

◎言の葉は、芽吹き、光をあびてたとえようもなく美しい浅い緑になりやがて緑を深くしていきながら、やがて紅葉となり、その葉を散らしていく……。その不思議で美しい千変万化する姿を見えなくさせているもの、感じさせなくなってしまう嵐のような力のことを「風遊戯」の「ことのは」としてみました。

◎ロラン・バルトにこんな示唆がある。「言語はファシストなのだ……。なぜなら、ファシズムとは、なにかを語ることを妨げるものではなく、なにかを語りざるをえなくなる強いものだからである」。

◎ことばを抑圧して沈黙させようとするのが問題とされがちだけれど、それよりも、むりやりにことばを語らせようとする、そしてそのことに無頓着であることのほうに注意を向ける必要がある。

◎賛成か反対か。肯定か否定か。白か黒か。そういう紋切り型の言葉を強要されるシーンはこのほか多い。マスコミのインタビュ어나アンケートなど、そうした例には事欠かない。そのことに意識的でなければ、ひとはそれと知らずに、ことばの権力を行使してしまっている。実際に、ことばを殺してしまうのは、ことばを強要することによってなのではないかと思う。

◎ことばは、言の葉のように、沈黙のなかでしずかにそよいでいるのがいい。そこでこそ、自由は育つ。

◎しずかな沈黙がゆるされないところには、自由の種は育たない。けれど、多く人は自由を求めてなんかないように見える。だから、言の葉に嵐を持ち込む。嵐の前では沈黙は許されないからだ。「ほら、こんな現実がある！それを黙って見ているというのか！」というわけである。「勇気をだして立ち上がれ！」ということ、人は戦いを求めることになる。そのほうが自由におびえなくてすむからだ。「自由にしなさい」といわれて、しずかにそよぐことのできない自分がかわいからだ。それはある意味、言葉の早産にもなり、奇形の言葉がそこから生まれれる。

◎スピノザにこんな問いかけがあるという。「なぜ人々は、あたかも自分たちが救われるためでもあるかのように、自ら進んで従属するために戦うのか」

◎ちょうど、國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』（岩波現代選書/2013.6.18）を再読したところだけれど、そこにもこんな問いかけがあった。「なぜ人は自由になることができないのか？ いやなぜ人は自由になろうとしないのか？ どうすれば自由を求めることができるようになるのか？」(P.222)

◎しずかにほほえむことのできる言の葉を持ちたいと切に思う。沈黙のなかでこそ、愛は育ち得るのだから。ひとはひとりで沈黙のうちに過ごさねばならぬ。ひとりのときに、人は愛することができる。ひとりであることができるから、ふたりであることができる。ひとりであることができるから、ひとりとともにいるこ

とができる。われを忘れずに。そして、深い深いところで、われという垣根を越えて。

◎しかし、そういう意味では、こうして言葉をいつもなから過剰に使ってしまうというの、自分を矛盾のなかに置くことになる。いつもそういう思いは消えなけれど、少しでもことばを(暴)力にさらさないようにしようと、ひらがなの言の葉だけを自分なりにそよがせてみたのが、今回の遊戯。あまりうまくはいかなかったけれど・・・。

《彷徨》

ほんとうに欲することを私は知らない  
欲することの前で踏み迷い  
いのちは燃えて灰になり  
心の渴きの癒えぬまま彷徨う

ほんとうに知ることを私は知らない  
知ることの前で踏み迷い  
世界の果てまで彷徨いながら  
知らないことに気づけない

ほんとうに歌うことを私は知らない  
歌うことの前で踏み迷い  
闇のなかでも灯せる声を  
捧げることができず彷徨う

ほんとうに信じることを私は知らない  
信じることの前で踏み迷い  
証を求め疑いながら  
溺れる自分さえ見えず彷徨う

ほんとうに愛することを私は知らない  
愛することの前で踏み迷い  
愛される願いに焼かれつつ  
孤独の森にひとり彷徨う

## ☆風遊戯《彷徨》ノート

◎風遊戯版「ファウスト」に、ちよい「神曲」プラス。

◎メフィストフェレスはどこにでもいる。メフィストフェレスは、ひとそれぞれ  
の魂の欠落を埋めてくれようとするけれど、それはほんらい、自分で埋める必要  
のある欠損。その穴を埋めてあげようというのが「誘惑」。

◎「誘惑」に真に対抗できるのは「自由であること」。依存によつてひととき支  
えられたものは、支えが失われたとき、倒れてしまう。ひととひとの関係性にお  
いても、自由である関係性と依存による関係性とは対極にある。

◎欲望が果てしがないことは、欲望の対象が失われたときによくわかる。死後の  
欲界での私たちの状態がそれに近い状態。死後は肉体がないので、肉体やそれに  
結びついた欲望はそれを満たすことができなくなる。それは、欲望そのものが問  
題であるというよりは、自分がほんとうに欲しているものが何かがわからないか  
らこそ、その代替物を限りなく求め続けているということでもある。

◎欲望はそうした身体的なところを超えて、たとえば「知りたい」というような  
ところにまで続いていく。むしろ、そうした身体的でないところのほうが強いと  
もいえる。課題ははるか先の先にもずっとあるということ。けれど、自分が何を  
欲しているかを少しでも意識することで、その欲望そのもののあり方は変容して  
くるのではないか。

◎そのようにわたしたちの「彷徨」ははるかに続いていくのだけれど、聖母に祈っ  
てもらって救済されるようなファウストのようなあり方を求めようとは思わな  
い。日本神話でいえば、逆説的だけれど、追ってくるイザナミに桃を投げ、千曳  
の岩で通せんぼして、禊ぎで汚れを払うようなことで終わりになる。これも悲し  
い。

◎だからここにはもちろん「答え」はない。答えのないところに「彷徨」の意味  
はある。シュタイナーの示唆するような「道徳的ファンタジー」の可能性こそが  
重要だともいえる。

《めぐり》

めぐるすべてのために  
わたしはわたしを捧げましょう  
涙とともに捧げましょう  
悲しいときは悲しいままに  
うれしいときはそのように  
涙は流れて川となり  
天へと向かいそのはてに  
大地をうるおす雨となる

ありとしあらゆるもの  
いきとしいけるものは  
あたえられあたえられ  
いのちのかてをつくり  
うまれうまれうまれて  
めぶきそだちしをえて  
ささげささげささげて  
あらたないのちをうみ  
めぐりめぐりめぐりて  
ひかりとやみをあゆむ

めぐるすべてのために  
光はみずからを捧げ  
その苦しみを色に変え  
季節はめぐり  
いのちは生と死を繰り返し  
天と地はめぐり  
星たちは明滅しながら  
不思議の幾何学を踊る

めぐるすべてのために

めぐみめぐみめぐみて  
 いのちのちのちかわし  
 ささげささげささげて  
 いきとしいけるもの  
 めぐるいのちのひかり  
 いくくしみともしあい  
 たゆまぬみちをあゆみ  
 めぐりめぐりめぐりて  
 めぐりあいめぐみあう

めぐるすべてのために  
 わたしはわたしを捧げましょう  
 捧げるのはわたし  
 捧げられるのもわたし  
 永遠という刹那で  
 わたしからわたしへ  
 はるかなめぐみの道をあゆみ  
 やがてめぐりあうわたしとわたし

☆風遊戯《めぐり》ノート

◎テーマは「サクリアファイス(犠牲・供儀)」としての「めぐり」ですが、「サクリアファイス」のほうはあまり伝わらなくなっているかもしれません。

◎宇宙が展開している、めぐっているということは、みずからみずからをみずからに捧げていることにほかならないのではないのでしょうか。逆にいえば、そうした「サクリアファイス」がなければ宇宙はその動きを止めてしまうことになりません。ありとしあらゆるものは、みずからを捧げることめぐっています。天は地に、地は天にみずからを捧げること天と地はめぐっているのだといえます。めぐりはめぐみでもあり、分かれたものがめぐりあい、またわかれ、を繰り返しながら展開しているわけです。

◎少し前に、鈴木順子『シモーヌ・ヴェーユ「犠牲」の思想』(藤原書店/2012.9.30)を読みながら、「犠牲」ということについて考えていました。今回の「風遊戯」には、シモーヌ・ヴェーユのイメージはあまり残ってないかもしれませんが

が、ぼくはどこかシモーヌ・ヴェーユに惹かれるところがあったりします。

◎「犠牲」といえば、主には宗教における犠牲と社会における犠牲というふたつの観点での犠牲がありますが、シモーヌ・ヴェーユの理想とする犠牲というのは、もちろん外的に強制された犠牲でも、宗教的・政治的などところでの熱狂における犠牲といった犠牲ではありません。そうした犠牲に対しては極めて批判的です。人身御供のようなことはいうまでもないし、国や組織などからの強制や強制でなくとも、自分がその一部になって我を忘れて熱狂するというようなあり方も到底肯定することはできないというのが、シモーヌ・ヴェーユ。

◎シモーヌ・ヴェーユのいう本来の「犠牲」は、どういう意味なのかということ、イエス・キリストが十字架上でみずからを供儀としたような、「愛の狂気」とさえいえるものこと。聖なる観点からの犠牲とでもいえます。この犠牲が、少しばかり理解がたいところがあるのは、どうしてもだれかがなにかの犠牲になるというような、他律的な発想から離れられないからなのでしょう。聖なる犠牲は、他律的な強制でもなく、愛のない狂気でもなく、もちろん偽善的なものや幼稚な正義感からははるかに遠い。

◎自分をさまざまな観点からでの宇宙的な「めぐり」としてとたえることができたら、あらゆる存在者はほんらい自分そのものでもありません。その観点からすれば、みずからが姿を変えた存在者へとみずからを捧げながら生きていくということがみえてきます。即物的近視眼的な見方しかできないから理解がたいところがありますが、宇宙的な霊性の観点にまで広げてみるならば、その観点に少しは近づくことができるかもしれません。

《沈黙》

耳をすます  
ただ耳をすます

わたしのなかから  
わたしに語りかけてくる  
あらゆる声から  
遠くはなれて  
それらを生みだす  
あらゆる思いから  
遠くはなれて

なぜ黙してはいられないのだろう  
何を守ろうとして  
言葉をはなつのだろう  
大きな声で  
そして賛成と反対を往復しながら  
ほんとうの言葉は  
そんな声の中には  
決して見つからないのに

沈黙のなかで  
耳をすます  
聴こえないものに  
声が声になるまえの深みで  
声になろうとしている声に  
耳をすます

すると  
わたしのなかで  
わたしを

わたしを証しするものを  
必死で守ろうとしているものが  
姿をあらわしてくるのがわかる  
その悲しみと叫びが

耳をすます

ただ耳をすます

すると

それらのはるかむこうで

静かに言葉をたたえ

守るべきだと思っていた

あらゆるものから遠くはなれた

わたしのもうひとつの顔があらわれる

☆風遊戯《沈黙》ノート

◎サイモン&ガーファンクルに「ザ・サウンド・オブ・サイレンス」という名曲がある。「Hello darkness, my old friend・・・(ハロー、暗闇、ぼくの古い友達)」。「沈黙」はほんとうは言葉にも音楽にもならないのだけれど、ひとはときに、それを言葉や音楽にしたくなるらしい。おそらくそれは、自分の言葉や音へのアンチテーゼでもあるのだろうと思う。

◎高校のとき、スイスの哲学者、マックス・ピカートの『沈黙の世界』という本を見つけて、それ以降、「沈黙」についてことあるごとに考えてきたように思う。そこにごうある。「沈黙は言葉なくしても存在し得る。しかし、沈黙なくして言葉は存在し得ない。もしも言葉に沈黙の背景がなければ、言葉は深さを失ってしまふであろう」。

◎「沈黙は金、雄弁は銀」(Speech is silver, silence is golden)と、イギリスの思想家・歴史家のトーマス・カーライルの『衣装哲学』にあるが、言葉で表現することにある意味強要されているところもある西洋だからこそ、このフレーズはことわざになってもいるのだろうと思う。たしかに、言うべきことを言うことは大事なことだけれど、それがすべてだと勘違いして、ロラン・バルトも示唆しているように、言葉にすることが強要されてしまうあり方には注意が必要だということだけは、意識しておく必要があるだろう。そして、言葉の背後にある深い沈黙言葉にならないものの深みとともにあることを。

◎ちょうど今朝の新聞に池澤夏樹のエッセイが載っていた。「大いなる沈黙へ」

という修道院の映画についてのものだ。修道院での修行云々でなくても、少しまわりを見まわしただけでも、たとえばマスコミなどでの垂れ流しのような言葉に私たちがあまりに無自覚であることに気づく。

◎「今は声高に言わなければならぬことが多い。／人には言いたいことがあり、それらのメッセージを伝える手段がある。広く遠く届くものと、慎重しくつづやかれるものがある。・・・こういうことを論じているとどうしても熱くなる。まるでサッカーの観戦だ。・・・そう思ったところでふっと深呼吸をして、興奮を静め、感情高揚の呪縛から自分を放つ。／自分の人格の中で政治的意見に関わる部分はそんなに大きくはない。本当ならばたった今の政治の惨状などから離れて、人間というものを悠然と広く見る視点に立ちたい。下品で浅ましい争いに背を向けて一人になりたい。・・・黙しよう。メッセージの回路を断とう。」

《歴史》

あなたに会いたい  
もうひとりのわたし  
あなたに会いたい

わたしはあなたに会いに  
どこにもない  
深い場所へと降りてゆく  
そこでしか会えない場所へ

わたしとあなたのあいだに  
歴史はひらかれる  
そしてその書物の白いページが  
いまという文字で記され続ける

わたしはあなたと対話する  
過去のわたしというあなた  
未来のわたしというあなた  
数限りない対話が生まれ続ける  
そこで世界の歴史が生きられる

一秒前のわたしと  
愛しあつたあなたと  
憎しみあつたあなたと  
二千年前のイエスと  
そしてイエスを売ったユダと  
ともに歴史を生きる

わたしは降りてゆく  
あなたに会いに  
歴史を生きるために  
今を生きるために

愛を生きるために

そのどこにもない場所で

生も死も

喜びも憎しみも

生きて動く模様となり

不思議を織りなしながら

それを纏うわたしの

永遠のからだを飾る紋章となる

☆風遊戯《歴史》ノート

◎郡司勝義という小林秀雄の晩年をともに過ごした方の『小林秀雄の思ひ出』（文芸春秋ライブラリー／2014.6.20）を読んでいたら、小林秀雄が若い方に向かって「歴史」について語っていた言葉が紹介されていた。これはシュタイナーの歴史のとらえ方ととても似ていると感じた。この視点がないと、ひとはおそらくどこへも行けないのじゃないかと思う。歴史を生きていないということは、その意味で、自分をきちんと生きて振り返ってないということでもある。振り返らないからこそ、視点がすぐに外に向いて、あれはいかん、これはいい、ということだけを繰り返して、自己満足のうちにどこにもいけない。

◎「歴史家といふのはね、過去を研究するものではないつてことです。過去をうまく甦へらせる人を、本当の歴史家といふんです。・・・さういふふうに歴史を考へますと、諸君は藤原の都の時と、諸君の子供の時代を調べるのが本質的に同じになるでしょ。両方とも過去です。藤原の方が時間が遠いだけです。片方は、君の時間が少いだけです。ぢや。昨日はどうします。昨日の君は、昨日の君はもうないですよ、過去ですよ、今はもうありやしない。昨日のことを君は思ひ出すね、その時、君は歴史家ぢやないか。昨日、何をしたか、忘れたか、一所懸命、君は考へるだらう、それは歴史を研究してゐることなんだ。それは君自身なんだ。・・・自己を知るとは歴史を知ることだといふのは、さういふことなんだよ。」(P.79-82)

◎復刊書フェアという書店のフェアで、精神病理学の木村敏の『関係としての自己』を見つけ、未読だったことを知った。2005年に刊行された論文集。木村敏の著作は学生時代以降、ずっとぼくの座右の書でもある。おりにふれて幾度も読み返し対話する、ぼくにとつての古典。

◎『関係としての自己』の基本的なテーマは、ごくごく単純化しているならば「私」には一人称としての「私」もいるが、三人称としての「私」もいて、その両者の関係性においてさまざまな精神病理も生じてくるということ。そういう意味では

三人称としての「私」は、「他者」でもある。さらにいえば、それらを時間性のもとでとらえるならば、単に過去―現在―未来において「私」をとらえるといふときに、今ここにいる「私」というアクティブな意識の位置づけによっても、「私」というのはさまざまな様相のもとにあるわけだし、さらにいえば、今このアクティブな時間性のもとにある「私」にしても、アポロンの私という自我性のもとにあるだけではなく、その深みにおいて、深層においてディオニュソスの「私たち」としての「私」の働きのもとにもあるといふことができる。そうした視点のもとに考察していくと、「私」と別の「私」、そして「汝」の「あいだ」こそが生きられた時間性だということもできる。(かなりアバウトな説明なので、正確に理解されたい場合は諸著書で)

◎こうした視点のもとに「歴史を生きる」私をとらえてみるならば、「私」はもうひとりの「私」であり、同時に「汝」でもある存在者との「あいだ」でさまざまに、今、ここで対話することそのものであるといふことができるように思う。それが生きるということであって、そうした生きられた対話としての歴史意識が欠けていると、常に過去の亡霊のような思想や自分に憑依してきているようなさまざまな想念やイデオロギーのようなものに操られてしまつて、それを自分だと思ひ込んだまま、さまざまな衝動のもとに言葉を使い、行動したり、ということになつてしまふのではないかと思う。

《橋》

思いはどこからきて  
どこへ去っていくのだろう  
今宵一夜と  
天の川を渡る牽牛ならば  
船で渡るか  
鵲の橋を渡るか  
思いは織女へ続いていく  
その後は知らない

五色の短冊  
笹の葉飾り  
紅黄白緑黒  
揺れている

思いはどこからきて  
どこへ去っていくのだろう  
装束を重ねて身に纏い  
橋からやってきて  
橋へと去っていく  
シテのように  
夢から夢へ  
橋懸りの向こうは知らない

金銀砂子の  
お星を眺め  
私が書いた  
願いの行方

思いはどこからきて  
どこへ去っていくのだろう  
私のなかの橋懸りから

思いは来ては去っていくのだ  
 空からきて空へ  
 星からきて星へ帰っていくように  
 そして夢の帰っていく先は  
 夢のまた夢

☆風遊戯《橋》ノート

◎「思い」や「願い」は、いちどアウトプットすると決して失われないそうです。ネガティブ、ポジティブの別は関係なく。けれど、この地上では、それがめつたなことでは直接現実化しないので、ある意味私たちは救われているところがあります。もし、思ったことがすぐに実現してしまったら、大変な混乱を引き起こしてしまうからです。

◎でも、「思考は実現する」といった思考の法則を強く出したさまざまな技法などもいろいろ紹介されていたりもします。けれど、それらがときに困ってしまうのは、多くの場合、それらの「思い」や「願い」の質やその手段が問われにくいところだと思えます。つまり、ヒトラーが自己実現しようとしても、ある部分、それらが実現されてしまうような怖さがあるわけです。「お金を儲けたい！」にしても、ときに、それはいろんなことを引き起こしてしまう。その「質」の部分をちゃんとクリアできるだけの魂かどうか問われないからです。

◎逆にいうと、どんなにささいな「思い」や「願い」にしても、決して実現しないわけではないというのがあります。そして、その場合、多くは、結局のところ、それらは自分に返ってきたり、「想念の塊」のようなものを形成し、他の人の同種の「想念の塊」と同調して肥大化したりもします。これはけっこうこわい。ある種の場所が、気持ちよかったり、逆に気持ち悪かったりするの、そういうもので地場が形成されてしまっているからだとも癒えます。どちらにしても、自分が出した「思い」や「願い」は結局のところ、自分で引き受けるしかないの、気をつけたいものだなあというのが、今回の若干の複線です。夢のまた夢、橋でつながれた思いは、実は自分そのものの未来だった！と。

◎さて、7月7日は七夕さまで、(新暦ではイメージがわからないところもあるものの)五色の短冊と笹の葉のイメージからでてくるものを少し言葉にしてみることにしました。台風も近づいてきていて、今日は星空は見えそうもない。一年に一度しか会えない牽牛と織女は悲しいなあと思いつつ、「思い」や「願い」の行く末を少しばかり案じてみた「風遊戯」となりました。

◎七夕の伝説では、天の川を渡るのに、船で渡るといふのと、鵜(カササギ)が橋を架けてくれるというのがあります。もともと中国の伝説では橋を架けるほうの話だったのが、いろいろ変わってきたりしたようです。ここではその「橋」のことからイメージを少しだけ広げてみました。

◎「橋」は、水平に渡すものだというイメージがありますが、「柱」も同じ語源だといえます。兩岸のハシ(端・間)を渡すものであって、岸と岸だけではなく、さまざまなもの端に架けるもの。天橋というのも、おそらくは天と地を橋がつなぐイメージなのだろうと思いますし、神々を数える単位が「柱」だということもあり、「橋」というのはその意味では、神々そのものであり、天と地をつなぐ存在なのでしょう。

◎能舞台には「橋懸り」という本舞台の左手から奥に、斜めに長く延びた、鏡の間に通じるところがあります。そこからシテは面をつけて登場し、思いのたけをワキに吐露し、やがて成仏(したかどうかはわかりませんが)して、またその橋懸りを通って帰っていきます。そのシテという霊的存在の去就のイメージを私たちの思いや願いの去就に懸けてみました。果たして、私たちの思いや願いはちゃんと成仏してめぐっているのだろうか・・・と。

◎立原道造「のちの思いに」に、「夢はいつも帰っていった」というフレーズがあって、それが思い出されたので少しだけそれもイメージしてみました。

《公案》

両手を打ち合わせる  
片手の声を聞け！

さあ言え

さあ言え

わたしは公案を生きただろうか  
生きているだろうか

すでに生は公案である

ひとはそれを生きねばならない  
ひとはそれを死なねばならない

なぜ生があるのか

なぜ世界があるのか

それそのものが公案であるからだ

愛は公案である

こころは公案である

からだは公案である

病気は公案である

時間は公案である

わたしは公案である

あなたは公案である

時代は公案である

金は公案である

政治は公案である

さあ言え

さあ言え

わたしは公案を生きただろうか  
 生きているだろうか  
 わたしという殻さえも脱して

答えのない答えを生きよ

生は待ったなし

苦を超えて

公案を歩め

公案を遊戯せよ！

☆遊戯《公案》ノート

◎参禅したことも公案を与えられたこともないし、これからもそういう機会は持たないだろうけれど、禅には親近感を持つている。そして、日常そのものを禅のように生きたいと思っっていたりもする。特別な場所ではなく、日々のなかで。

◎おそらく禅というのは、そして公案というのは、こうして生きていることそのものでもあり、そこにいかに自由を見出すかが重要である。その意味では、仏教という四苦八苦というのも公案そのものなのだろう。そしてそれを「解脱」するということは、それをたんに「脱する」ということではもちろんなく、それそのものを生きることを離れないことでそれを超えることなのだろう。

◎シュタイナーは、仏陀は愛を説いたが、キリストは愛を生きただけという。キリストにおいては復活ということが最重要の鍵になるが、それは「生きる」(もちろんそれは「死する」ということでもある)ことそのものの極北にあるものとしてとらえる必要があるだろう。

◎それは、グノーシスの仕方では地上を離れてしまうのではなく、いまこの「からだ」そのもの、ひいては自然を、世界そのものをも復活・変容させるといふ契機でもある。その「復活」というのはもともと理解しがたい鬼門でもありもともと難解な公案であるともいえるが、それに近づくためにはそれを生きるしかない。パウロも内村鑑三も、その「復活」を否定することはキリストの福音を否定することになるとした。シュタイナーの神秘学も、キリストなしでは成立しない。

◎ともあれ、日々生きるということは、実感としていっても、公案以外のなにものでもない。「答え」などは気休め以外には見つからないし、「出口」がみつかるわけでもない。腹を据えて、遊戯してみるしかなさそう。深刻な顔はやめて、遊び心を持って。

《仮面舞踏会》

私の顔は仮面であるか

ああそうだ

外すことのできない仮面だ

二つの穴から世界を見ているのだ

世界でないものとなつて

混沌に穴は開けられ

仮面をつけて身を躍らせる

かつて世界は私だったか

ああそうだ

おのずからを捨て

みずからになつた私は

地を歩み血を流し

世界に向かって立っている

空に向かって叫びながら

あなたの顔も仮面であるか

ああそうだ

その仮面も外すことはできない

二つの穴から私を見ているのだ

世界から遠く離れて

私の両手をとって踊るのだ

らつたらつた狂つたように躍るのだ

☆風遊戯 《仮面舞踏会》 ノート

◎夏なのでちょっとホラー気味、怪談風の風遊戯にしてみました。のっぺらぼうが、「こんな顔かい」とふりかえるように。ちよつと不気味な私とあなたの仮面舞踏会。どちらの顔もわからない。互いを知らずに、両手をとりあつて躍る。今回は、ちよつとダークでニヒリスティックな感じでいってみました。

◎わたしたちは世界のなかで、ある意味ひとつの視線でしかない。そこから世界を見ている。世界は広がっているように見えるが、世界は私たちの視線の「点」に折りたたまれている。逆に言えば、その「点」が展開している。

◎仮面はペルソナ。ペルソナは人格でもある。人格は仮面のように私たちを躍らせている。ときにそれを外したくなるが、その仮面の下にはなにもない。仮面の二つの穴の中にあるのは闇ばかり。

◎混沌の話は、荘子から。混沌に穴を開けると死んでしまったという話から。あの意味で、わたしたちは穴をあけられた混沌のような存在だ。死者が踊っている。落語に「らくだ」という噺がある。死体をかかえて踊らせる噺。私たちはひとりひとりが自分の死体（もちろん生体でもあるのだけれど、ある意味同じこと）を抱えて踊っている存在だともいえるわけである。

《軽口》

こんぺいとうは  
いとをかし  
おかしのなかでも  
いとをかし  
つのがによきによき  
のびてきて  
あっというまに  
おほしさま

もののけさまは  
ものものし  
ものなかでも  
ものものし  
みえないすがたで  
おぼけだぞ  
さみしがりやで  
でたがりや

にほんのひとは  
にほんのはしで  
ひとつのものを  
つまみます  
かたてでてびょうし  
できないように  
はしもにほんで  
ひとつです

おしりふりふり  
しりたがり  
ふりふりだんす

おどります  
 ふっっておどって  
 そのあとは  
 しりたくもあり  
 しりたくもなし  
 くちがかるくて  
 すみません  
 くちがすべって  
 しまいます  
 ついついほんねが  
 こぼれます  
 おもいくちだと  
 つかれます

☆風遊戯《軽口》ノート

◎暑くなってきたので、暑苦しいのではなく、軽口でも。ジョークを言うというよりは、軽口をたたくといういい方のほうが好きです。世の中、重い話が多すぎて、そのくせそこで使われている言葉もあまりにもものしく、かつあまりに内容がなく軽い。ちょっと疲れ気味なので、今回は「軽口」で。

◎以下、それぞれのテーマについての蛇足。ほんとうは最初の「こんべいどう」だけでもよかったのだけれど、ついでに「遊戯」にしてみました。

◎金平糖は、寺田寅彦の随筆を思い出したので。今回の「軽口」もそれが誘い水に。以下、その随筆「金米糖」から。「この金米糖のできあがる過程が実に不思議なものである。私の聞いたところでは、純良な砂糖に少量の水を加えて鍋の中で溶かしてどろどろした液体とする。それに金米糖の心核となるべき芥子粒を入れて杓子で攪拌し、しゃくい上げしゃくい上げしていると自然にああいう形にできあがるのだそうである。／中に心核があつてその周囲に砂糖が凝固してだんだんに生長する事にはたいした不思議はない。しかしなぜあのように角を出して生長するかが問題である。」云々。

◎「もの」は物質でもあり霊でもある。物質だといっても、たぶん私たちは「もの」そのものをみてなんかいない。見ているのは、マヤー（幻）。だから唯物論的に世界を認識しようとする人は、幻を現実だと思ひ込んでいる。ある意味で、世界

は「もののけ」で「おぼけだぞう！」と知っているのに気づかないか、ただただこわがってしまうだけになる。

◎なんだか今の日本は「日本」「日本」となんだかうるさい。「日本」といえばいうほど、「日本」はどこかにいってしまっているのではないか。小林秀雄が本居宣長の「大和魂」について示唆しているようなものだと思う。「大和魂」は国粹的なあり方なのではなくて、「もののあはれ」を知ることや「生活的な知恵」のことだといえます。たとえば、お箸なんかも、そういう大和魂的なものなんじゃないかなあということ、少し。

◎お尻の話は、世の中の賢げな人の言うことを見て（聞いて）いると、あまりに馬鹿馬鹿しくなることがあるので、「知りたがり」にかけてみました。

◎最後は「軽口」についてちょっと。ぼくは面倒なものもあって、気取ったり、おべんちゃらをいったり、偽装したりするのが苦手。ということ、今回は「軽口」でした。

《シャバ》

シャバダバダ

シャバダバダ

生きているのは

シャバダバダ

死んでいくのも

シャバダバダ

シャバで暮らせば

シャバダバダ

シャバで話せば

シャバダバダ

シャバで動けば

シャバダバダ

シャバに生まれて

シャバダバダ

シャバの迷路で

シャバダバダ

シャバで働く

シャバダバダ

シャバの渡世は

つらすぎて

バシヤウマみたいに

シャバダバダ

シャバの掟に

しばられて

バシバシやられて

シャバダバダ

シャバダバダ  
シャバダバダ  
それでもシャバは  
シャバダバダ  
一蓮托生  
シャバダバダ  
善いも悪いも  
シャバダバダ  
泣いて笑って  
シャバダバダ  
お役を賜り  
シャバダバダ  
騙し騙され  
シャバダバダ  
殺し殺され  
シャバダバダ  
老いも若きも  
シャバダバダ  
シャバダバダ  
シャバダバダ  
まだまだ続く  
シャバダバダ  
泥のなかから  
シャバダバダ  
静かに花咲く  
シャバダバダ  
拈華微笑の  
シャバダバダ

## ☆風遊戯《シャバ》ノート

◎今回も、前回に続いて、暑いし、世の中暗いので、シャレでもいうしかないということ、速射で「シャバ」の唄を歌ってみました。

◎『困ってるひと』から3年ぶりの大野更紗の新刊『シャバはつらいよ』(ポプラ社)がでていたので、その「シャバ」に触発された遊戯。

◎『シャバはつらいよ』の表紙には、寅さんのような姿のイラストの大野更紗が描かれている。これだけシリアスな状況を「絶賛生存中」の大野更紗には、どれだけの人が勇気つけられただろうかと思う。池田晶子の死後、設けられた「わたくし、つまりNobody賞」を受けたのも、なるほどと思った。

◎新刊の「はじめに」に書かれていたことに深くうなずいたのが、今回の「遊戯」を書いたそもそもの理由。それを引いてみる。

◎「わが二十九歳の身体は、「困難の類」はなんでも扱う、「困難の総合商社」になりつつあります。／この奇怪な病を発病したときから、実は、ずっと考えていることがあります。わたしがかったこの「難病」は、何かに、似ている気がするのです。そう、何かに、似ている……。／出口のない経済不況、いつまでも改善されないどころかむしろ悪化の一途をたどる社会保障、医療や福祉の制度、金融危機、就職危機、家族の崩壊、地域の崩壊、うつの増大、自殺者の増加、孤立死の頻発……。／(その他いろいろ)！！／あっちゃこっちゃで火の手が上がリ、何から手をつけていいかわからないので、とりあえず、「対症療法」で時間を稼ぐ。根本的な問題は、とりあえず先延ばしにする。システムそのものの、全身性の機能不全に、太刀打ちできない。／ああ日本列島は、まるで「難病列島」哉。」

◎まさに、日本は(というよりも世界全部ですが)いま「難病列島」で、どうしようもなく、とりあえず目先の「お金」とかを最優先した「対症療法」でしのごうということになっている。今の政治状況にしても、それをモグラ叩きのような「対症療法」しか考えられないのだろうというのがわかる。おそらく、ほとんどの人が、意識無意識はわからないけれど、「仕方ないじゃん！」的なんだらうと思う。今、とりあえず食っていかないといけないから、と。まさに、シャバの論理(というか感情)。

◎誰かを悪と決めつけたりしたところで、よく考えればわかるように、みんな「一蓮托生」であることはまちがいない。そのことを仏教的にいえば(逆説的ではあるけれど)「山川草木悉皆成仏」というようにも思う。善い悪いを超えた「シャバ」の「悉皆成仏」への迷路のような道。

◎だから、そういうあまりにも出口のないシャバ状況のなかでしか得られないものは何だろうというふうに考えて見ることはできる。賛成！反対！を超えた、そこでしか成り立たないような泥の中の蓮のような状況をどれだけ「宇宙観」「世界観」として持ち得るだろうかということ。

◎難病のなかで「絶賛生存中」の大野更紗ほどの苦しみとは比較できないけれど、生まれてこうして生きていること、シャバに居ることそのものが、ある意味で「難病」そのもので、そのことをどれだけ自覚的に絶対矛盾的に生き死にできるかというのはなかなかの「修行」になるのはまちがいないと、「シャバダバダ」。

《ふろしき》

つつんで  
むすんで  
ひらいて  
たたんで

姿は変幻自在  
かたちを決めないで  
そつと寄りそい  
わかれたあとは  
さりげなく

つつんで  
むすんで  
ひらいて  
たたんで

ふろしきになれたら  
わたしという場所は  
宇宙が息をするように  
ひろがったり  
つつみこんだり  
おりたたまれたり

つつんで  
むすんで  
ひらいて  
たたんで

ふろしきの音楽があつたなら  
そこにはどんな音も

包みこむことができるだろう  
ひらくとそこから放たれて  
鳥のように空をゆく

つつんで  
むすんで  
ひらいて  
たたんで

ふろしきの科学があつたなら  
そこにはどんな真実も  
包みこむことができるだろう  
世界のかたちに寄りそいながら  
わたしの場所にも届くだろう

つつんで  
むすんで  
ひらいて  
たたんで

ふろしきになれば  
あなたをつつんで  
むすんでみたい  
そしてひらいたそのあとは  
小さく小さくたたまれて

つつんで  
むすんで  
ひらいて  
たたんで

ふろしきのわたしは  
たたまれて生まれ

ひらかれながら  
世界をつつみこみ  
そしてむすび  
また死へとひらかれてゆく

☆風遊戯《ふろしき》ノート

◎風呂敷は「述語性の文化技術」だという。山本哲士『哲学する日本 非分離／述語性／場所／非自己』（文化科学高等研究院出版局／2012.2.1）が刺激的に面白い。今回は、その風呂敷についてのところを少し。

◎「風呂敷は一枚の布である。この風呂敷はいかなるものでも「包む」ことができる。書類や本はもちろんのこと、ビール瓶でもスイカでもほとんど持ち運べるものならなんでも包むことができる。鞆はそうはいかない。スイカや一升瓶は包まない。この、風呂敷の技術は、相常に高度である。なんでも選ぶ物の方に合わせて包むことができる。箸の多様な述語機能のように、包む、結ぶ、運ぶ、巻く、まとめる、覆う、隠す、かざる、保護するなど多様な働きをする。／これは「対象」に合わせる技術である。これを「領有」とわたしはくくる、〈所有〉という主語的行為とは逆の述語行為に関わる仕方を言う。自らが対象に合わせて変幻自在に変わりうる技術であるが、対象から離れてはいない。対象と非分離にあつて相手・対象に呼応しうる技術が、「述語技術」である。適用とか適合、合一というのではない、最初から技術的に非分離になるように作られているのだ。非分離関係に置かれていることで、述語的に作用しうる。」

《世界劇場》

悪夢をみている  
悪夢をみつづけている  
そう思ったことはないか  
目の覚めるたびごとに  
繰り返されるこの世界

悪夢をみているのは  
いったいだれなのか  
わたしという囚われ人  
わたしがわたしを  
閉じこめている世界

悪夢はどこにあるのか  
わたしのなかか  
それとも世界そのものか  
世界という関数に代入されるわたし  
わたしという関数に代入される世界  
そのウロボロスのような合わせ鏡のなかで  
悪夢は静かに踊っている

夢幻能のように  
わたしは橋掛かりから現れるが  
みずからがその語りを聴く者でもあり  
また見所でもある  
見ること世界を変え  
見られることで  
みずからを変える者でもあるのだ

秘密などどこにもないのだろう  
愛が隠されることなど決してないように

ただみずからの仕掛けた魔術を解いて  
秘密という蜜を味わえるように  
愛の不思議世界に魅せられるように  
世界そのものが劇場となって  
ときに悪夢を楽しませてくれるのだ

そのひとときの遊戯のために  
無は有へと変容し  
永遠は時間の姿をとって  
めくるめくステージの上で  
わたしと世界を踊らせている

☆風遊戯《世界劇場》ノート

◎朝起きるときにはどくに、鬱きわまりない状態になっていたりする。まさに、悪夢の世界にやってきた！という感じ。そこから抜け出すのはかなりむずかしく、最近では早起きをして音楽を聴くことからはじめることで、なんとかしのいでいるけれど、悪夢の感覚はやはり避けようもない。しかし、それまでいた夢の世界がいかとうとそういうわけでもないのがよけいに苦しい。そういう世界から脱出するのはほんとうにむずかしく、脱出しよう！という発想そのものをなんとかしないとイケないのだろうとずっと思っている。今回はその発想そのものの転換から、ある意味ではよけいに救いようのない「世界劇場」になっているけれど、これこそが世界の秘密であり、愛の謎でもあるのだろう。

◎世界は劇場であるというのは、古代ローマの詩人ペトロニウスの詩句以来のもので、イギリスのエリザベス朝のシェイクスピアの世界でもおなじみの考え方。『お気に召すまま』の一節にも、「All the world's a stage, And all the men and women merely players.」（この世は舞台、男も女もみな役者だ。）があるように。セルバンテスの『ドン・キホーテ』、カルデロンの『人生は夢』などにもこの考え方は見られるようで、この時代以来、こうした作品の登場人物の生き方の根底に世界劇場の考え方が見られるようになったのだといえます。

◎もちろん、こんかいの風遊戯でその考え方を踏襲したいとかいうのではなく、世界という謎、わたしという謎のほうに目を向けてみたい。

◎ハイデッガーに「*Sein und Zeit*」という有名な哲学書があって、通常、「存在と時間」または「有と時」というふうに訳されたりもしているけれど、おそろしく「存在」「有」というのはきわめて主語的な論理による理解となっていて、「存在」や「有」として姿を現出してくる根底には「無」があるのではないかと思っている。

もちろん「無」というのはなにもない、ということではなくて、むしろすべての根底にある「無の場所」とでもいえる西田幾多郎的な理解からのもの。その意味でいえば、「時間」もまたそれに対応した「不」としての「間」のような意味でとらえるのがいい。

◎作者も役者も演出家も観客もすべてが「不」にして「不」であり、それらが「存在」「有」としての「不」であるためには、それらの根源としての「不」である「無」を必要とする。「不」は「不」なのだ。だから、夢も現も「不」にして「不」である。

◎ちなみに、能の主要な登場人物はシテとワキであり、観客は「見所」という。夢幻能では、シテは亡霊のようにして橋掛かりからしずと現れ語り踊り、それをワキの仏者などが成仏をさせる、というのようなかたちをとることが多い。しかし、それらのシテもワキも、また見所も、同じ世界劇場の「不」にして「不」の無であり有なのだろう。

《さかさま》

逆立ちしていることに  
気づけないピエロが  
笑いながら泣いている  
教えられたとおりにやってきたのに

求めよ  
さらば与えられん  
けれど  
右は左に  
上は下に  
求めれば求めるほど  
逆のものがやってくる

教えてもらおうとすれば  
じぶんで学べなくなる  
健康にしてみようと思えば  
ケアなしでは生きられなくなる  
与えられるものを求めつづければ  
ほんとうにほしいものがわからなくなる

群れのなかで  
自分が見えなくなったピエロは  
笑いすぎて泣いている  
泣きすぎて笑っている

## ☆風遊戯《さかさま》ノート

◎イリイチを読みながら少し。「イリイチの基本的な考えは、発展がある閾を越えると、産業システムは目的として提供しようとしたものに反した結果をうみだしていくということにある。教育をうけるほど愚かになっていく、治療するほど病気はふえていく、速度が速くなるほど移動時間がかかるようになっていく、という《逆生産性》である。」「イリイチが言わんとしたことは、単純明快である。自律性をとりもどそう。バナキュラーな文化をとりもどそう、人間としての尊厳をとりかえそう、希望をもとうということである」。 (山本哲士『文明を超える「希望」の思想 イバン・イリイチ』(文化科学高等研究院出版局/2009.12)より)

◎現代の文明・文化のもっとも問題になっていると思われるのは、「自律性」がどんどん失われてしまっているということ。どんなに素晴らしく見えることでも、それらが外からやってきて、ある種のシステムや型などに従って生きていくと、自分で考えることができなくなる。免疫力も衰えてくる。日本的に言えば、「守・破・離」の「守」である「型」にしがみついていると、ほとんどそれ以外のことができなくなってしまうということだともいえる。自分では目に見える権威に従っているようには感じなくても(権威や権力や主義、マスコミの情報などに自分から従って疑わないのは話にさえならないけれど)、すべてが他律的になってしまう。

◎自分で考える力は、悩むことのできる力や苦しむことのできる力でもある。養老孟司の「バカの壁」に関連した話を読んだことがある。ある講演会で自分で問いをもち考えることがまずはバカの壁を克服するためには必要だという内容の話をしたところ、会場から「どうすればそれができるのですか」という質問があったとか。こうした事例を典型的にとりだせば、それが自分のことだとは思わないことが多いけれど、世の中のほとんどのことは、自分で問いをもたないですむようにするためのさまざまサービスに満ちていて、そのサービスをうけられるかどうかは「お金」に依存しているということがわかる。内田樹が教育について警鐘を発しているのも、教育が経済原理で動いているということにあるように思う。「その教育を受ければどのような結果・効果、つまりはサービスを受けることができるか」という発想。

◎世の中は、ほとんど末期症状のようになっていて、体制に迎合しようが反発しようが、ほとんど同じ発想にしかみえないところがある。声を荒げている多くのピュアな人たちは、発想としては「世の中をよくしたい」と思っているのだろうけれど、それらは「目的として提供しようとしたものに反した結果をうみだしていく」という発想を持ち得ていないのではないかというようにも見える。最善を求めようとして、最悪を求めてしまうということ。シュタイナー的にいえば、アーリマンとルシファーを反復横跳びしているようなものだろうか。

《振り子》

揺れている

振り子のように

しかも不規則な仕方

揺れるならば

いつそふりきってしまえ

狂気のように

けれどその必要のないときだけに

谷から山にかけのぼり

山から谷にかけおりるように

自分のなかの極小と極大を踊れ

振り子の腕をさえ

伸ばしたり縮めたりしながら

いつたいなにか揺れているのだろう

揺れながら

揺れ続けながら

自分という世界の

あまりにもちっぽけな振幅のなかで

それを見ているものがある

どんなに振れたところで

ぐると一回転するだけのこと

そして見つけるんだ

振り子を支えている点を

たとえそれが動いている点だとしても

揺れながらそれを見ているものを

☆風遊戯《振り子》ノート

◎わたしたちは、ときに狂った振り子のようになって、ただただ振れるしかないときがあります。あまりに苦しく閉塞的でどこにも行けないと思ったとき、どこにそこから逃れる道があるのか。理研の笹井芳樹副センター長の自殺報道を見てふと書いてみたくなりました。あまりうまくない表現かなとは思いますが……。

◎感情の訓練としては、ふだんから天にも昇るような気持ちと地に潜るようなうちひしがれた気持ちのような振幅を避けるように、というのがあって、平常心、不動心に必要性が説かれますが、ほんとうはそんなにきれいな事じゃすまない。むしろ、ときにそういう天と地の振幅を自分なりの最大限に置いてみるということも大事なことでないかと思えます。

◎逆境のときと順境のとき、それぞれに必要な魂のありようがあるわけですけど、ある意味では、逆境のときに最悪の対応をしようとか、順境のときにも思いついて馬鹿なことをしてみようとかを、可能な限り「想定」できるようにしておく、なにかのときにそれが役に立つのではないかと。

◎そういうときにいちばん大事なのは、狂ったように振れているものというのは、ほんとうは自分の中心ではないということに、少しだけでも気づく余裕なのではないかと思えます。

◎そういう意味でも、ふだんから自分なりの世界観を持っているかどうかというのは大事かもしれません。多くの場合、自分のいる「場所」というのは閉じた世界なんですけど、実は閉じていないことに気づくことも大事かと。たとえば、科学者は多く「科学的でなければならぬ」と信じこんでいるわけですけど、その「なければならぬ」というのがどこから来ているのかを考えているかどうかというのはとても大事なことでないかと思えます。ですから、自分のなかで問い返されることのない、さまざま「なければならぬ」の世界のなかにまともに生きようとする、こんなに苦しいことはない。まじめなひとほど、そこから逃れられなくなりません。逆にいえば、不誠実な人は、そういう世界を利用することしか考えていなかったり。その両方から自由でいられる世界観が必要なんだろうと思えます。

《変化》

――広島原爆の日に

変わりたい！

ある日

そう決意する

けれど

人は変わり

また変わらない

食べ物の好き嫌いひとつ

変えることはむずかしいだろう

愛と憎しみは

勇気と躊躇のまえで

せめぎあい

そしてもとの場所に

帰っていったりもするから

いつのまにか慣れてしまうことだってある

それが良いことか悪いことかはわからない

暴力のまえで麻痺してしまうこともあるからだ

目の前の世界が広くなるなら素敵だけれど

ジョンケージの四分三三秒が

聞くことと聴くことを変えたように

ものさしを変えるきっかけはほしいけれど

その種から果実を得るためには

土や水や光

そしてこの手が必要になる

変わる

変わらない

ぼくも

そしてきみも

お金でなんか買えないもの

見ることさえできないもの、のまえで

ぼくらはせめぎあう

変わりたい！

そう思ったとき

種を植えることにしないか

嫌いなものという種だ

種をその手にとって

自分という心に植えてみる

芽はでるか花は咲くか

希望は心の箱に残っているか

☆風遊戯《変化》ノート

◎今日8月6日は広島原爆の日。69年目の夏。

いまだ原発とさえ、サヨナラできずにいる。そんな日のひとこととして。

◎いくら声を荒げて人を社会を変えようとしても変わることはないだろう。目や耳が頑なに閉ざされてしまうだけだ。希望はいつもひとりひとりの心のなかにある。そこにしかない。パンドラの箱のような心のなかに。その箱には最後に「希望」だけが遺されている。その芽を育てるか、枯らしてしまうかは、わたしたちに委ねられている。

◎佐々木敦『4分33秒』論／「音楽」とは何か』（発行：株式会社Pヴァイン／2014.6.14発行）を（なんだか、いまさらという感じもするのだけれど）読んでたりする。ジョン・ケージの音楽から、いろんなことを話している本。思っていたよりも面白い。

◎おそろくだけでもそうだと思っけれど、4分33秒のあいだピアノの前

にただ座っているだけの音楽の話聞いたときには、それなりに興味をひかれたことだと思う。佐々木敦の好きなジョン・ケージの言葉にこういうのがあるという。「あなたに出来ることは、突然聴いてしまうことだ」。そこで大事なことは、おそらく「突然聴い」たあとどうするかなのだろう。実験的な試みをおもしろがっているだけでは、何も変わることはないだろうから。食べ物は食べてはじめて栄養になる。

◎話は、「変わる事」について。だれでも、自分のいろんな限界を克服したいと思っている反面、ゼツタイ変わりたくないと思っているところもそれなりにあるだろう。けれど、それなりに人は変わっていくかざるをえない。どうせ変わるのであれば、自分を豊かにできるほうがいい。とはいえ、それはそう簡単なことじゃない。ゼツタイ嫌いなものを好きになるのがむずかしいように。

◎だれでも、自分はそれなりに正しいと思っているし、そう思い込んでいく。その部分を変えたいとは思ってもみない。変えなくてもいいかもしれないけれど、ひよっとしたらそこにこそいちばん大きな課題があるのかもしれないにもかかわらず。嫌いで、反対で、憎んでいるものを理解すること。それが身近なところにあるものだったらなおさらのことむずかしい。だからこそ、そこが死角になってしまう。人は変わる必要があるところで変わらないし、よけいにマズイ方向に変わっていくことになるかもしれない。むずかしいところだ。

◎イリイチの遺言的な著書『生きる希望』にこうある。「未来」などない、あるのは「希望」だけだ。そのことを今日はあらためて考えてみたいと思っている。自分のなかに植えた「種」が「希望」となるかどうか。

《線》

白紙に線が引かれる  
それはなにか

線は世界を区切り  
かたちを遊戯する

白紙はものか無か  
線はその捧げものか

線が文字になり  
言葉になる

それは読まれ  
ときに歌われる

白紙になにが起こったのか  
線がなにをしたのか

点は線になり  
線は面となるか

面は線となり  
線は点となるか

謎のように  
白紙に線が引かれる

謎のように  
世界に線が現れる

☆風遊戯《線》

◎「線」で書いてみようと思ったのは、最近再刊された近藤謙の『線の音楽』（ア ルテス・パブリッシング 2014/7/1）とティム・インゴールド『ラインズ線の文化史』（左右社 2014/5/21）がきっかけ。とはいえ、それらの本と今回のテーマは直接的には関係ないかと思えます。

◎世界にさまざまなきことが起こり、それがさまざまなかたちをとって現れてくる ことの不思議を、白紙と線、世界と線ということで書き付けてみました。ちよつ とした抽象絵画かコンセプトチュアルアート、または音楽の遊びのような感じ でしょうか。

◎世界は三次元のようにイメージされますが、実際私たちの前には平面しか見え ていませんし、その平面もさまざまな線の遊戯のようにしか現れてきません。色 の遊戯ということもできるかもしれませんが、ここではそれも含めて「線」と して象徴させてみました。もちろん、音の世界も同様に。

◎白紙を絵巻物にしたり、歴史にしたり、天空の地図にしたり、はたまた時空の 場にしたりすることもちよつとした想像力さえあれば簡単なこと。

◎ひよつとしたら、わたしたちの心的な現象もこうした白紙と線のような感じで イメージできるかもしれません。そこで生みだされる線の動きとそれが生みだし たように思える意味のようなものに、わたしたちはさまざまに反応していきます。 とても神秘的なことだともいえます。謎のような。

◎世界という白紙からさまざまな「もの」が現れては消えていきます。生も、そ して死も。素粒子からはじまる物質もそうですが、もののけの「もの」もまた。 シンプルなところから、極めて複雑なところまで、白紙と線を使った瞑想などでもい かが。

《戦い》

幾時代もの昔から  
茶色い戦争続きます

戦い続けて日は暮れて  
戦いなして世は済まぬ

この世はすべて闘技場  
勝った負けたで日が暮れる  
赤勝て白勝て旗を振る

神々さえも戦いばかり  
天使も悪魔も大騒ぎ  
戦いなしじゃ収まらぬ

幾度も幾度も問い返す  
戦わないためできること  
それもまたもや戦いに

気づいてみれば心のなかも  
戦いなしては済まされぬ  
勝ち負けなしでは済まされぬ

己に勝つためまた戦って  
負けた己はどこへゆく  
勝った己はどこへゆく

ギータのクリシュナ語ります  
なすべきことをやりなさい  
戦いながら自由のまま

見えるともないブランコが  
じゆう ふじゆう ゆれてます  
逆さになったりまた戻ったり

幾時代もの昔から  
茶色い戦争続きます

この世もあの世も心のなかも  
勝った負けたのブランコが  
不生不滅とゆれてます

☆風遊戯《戦い》ノート

◎いうまでもなく、最初のフリーズは、中原中也の「サーカス」のフリーズ「幾時代かがありまして／茶色い戦争ありました」のパロディ。「見えるともないブランコ」も同じく。

◎戦うということが皆目わからなかったことからぼくの生は始まっているようにも思う。それで幼稚園はすぐに逃亡してしまっし、学校という檻のなかでの競争にもなじめなかった。運動会の競争でも競争の意味がわからないまま逆送したり。そのままずっと来ていたりする。もちろん、競争や勝ち負けから自由なわけもないけれど。

◎どうして争って競争しなくてはいけないのか。人と関わることで争いは起こる。ならば人と離れて暮らす以外にない。ということ、基本、心のなかでは隠遁者として、けれど生まれてきた以上はそういう逃避もできないし意味もないので隠遁しないではいる。

◎いいがげん長く生きてきて、「戦う」ということが避けられないこと、その意味もおぼろげながら見えてきたこともある。しかし、戦うことから自由であるままに戦いの渦中にいるというのは、かぎりなくむずかしい。

◎とはいえ、世の中は疑似戦争としてのスポーツやら偽善的な姿をした競争原理、露骨な競争原理などのなかで進んでいきながら、また「戦争はいけない！」と叫んだりもする。戦争なんかはないほうがいいのはいうまでもないことだけれど、おそらく事はそんなに簡単なことじゃないとも思っって複雑な気持ちになっってしまう。

◎どちらにせよ、大事なものは、みずからのなかで、そして外で起こっているさまざまな争いについて意識的であることだろうと思う。勝った負けたという意識か

ら自由な人はまれだろうと思うけれど、少なくとも勝った負けたの前後についてしつかり見ておくことは少しはできる。勝っても負けてもどちらも自分をそれなりの檻に閉じ込めてしまうことは多いのだから。喜びと悲しみはどちらにもあって、勝てばいいとは一概にはいえないところも多い。心のなかもまた同じ。己に勝つーというときでさえ、そこには勝った自分と負けた自分がいて、どちらの自分にも自由への道を探すことが求められるだろう。とてもとてもむずかしい。

◎ギターはもちろん「バガヴァット・ギター」。「知性のヨーガ」「行為のヨーガ」など。

◎書いた後、ふと思い出したのが、とても古いですが、水前寺清子の歌う「どうどうどつこの唄」(作詞・星野哲朗)。「勝った負けたとさわぐじやないぜ／あとの態度が大事だよ……」。(ちなみに「いっぽんどつこの唄」というのは「ぼろは着てても心は錦……」)

《発見法》

謎のように

世界が現れる

そしてわたしも

謎のようにここにいる

まだ見ぬなにかのまえで

なにをどうすればいいのか

それさえわからない

問うことからはじめてみる

世界はそしてわたしは

問いの数だけ

そこに現れてくれるから

問うことはむずかしい

問われないときは渾沌

分かとうと穴を穿てば

合わせ鏡のまえで

みずからを映すように

問いはどこまでも錯乱していく

愛する人がそこにいるのに

愛を問えないために

出会えないままにいるように

見ているけれど見えていないところで

隠されていないものが隠されてしまう

問いを探すために

はるかな旅にでる必要はないだろう

世界はここにあり

わたしはここにいる  
 永遠という無限のなかで  
 問うことそのものが  
 世界となりわたしとなるのだから

問うことで樹は亭々として聳え  
 問うことで星は群れとなって流れ  
 問うことで鳥は飛翔し季節を歌う

謎のように  
 世界が現れる  
 そしてわたしも  
 謎のようにここにいる

☆風遊戯《発見法》ノート

◎「まだないもの」を見つげるために、わたしたちはこうして生まれてくるのではないかと思っている。そうでなければ、この地上生活は既知の繰り返しに過ぎなくなってしまうから。

◎「発見法」はヒューリスティクス heuristics の訳語。「世界大百科事典 第2版」では、次のように解説されているとのこと。「発見」に資する思考法ないし技法をいう。発見には、〈事実の発見〉と〈概念の発見〉と〈法則の発見〉と〈理論の発見〉の四つの層が区別される。このうち〈事実の発見〉は、レントゲンによるX線の発見などのように偶然の要素が介入することも多い。これに対し、〈概念の発見〉は、たとえば重力や電子の概念のように、それについての理論の発見と相即的であることが多い。そこで通常〈発見法〉は、主として法則や理論の発見についていわれる」。

◎「見ていられるけれど見えていないところ、隠されていないものが隠されている」というのは、ポーの盗まれた手紙にある「隠したいものをあえて隠さないこと」によって相手の盲点をつく「探偵小説風のイメージ」から。見る必要のあるものは、隠されているのではなく、ただ見えていないだけだということ。けれど、見るためには、見るこそそのものが創造になっている必要がある、ここではそれを「発見法」という言葉で表現している。

◎渾沌の話は、荘子の内篇の最後、第七「応帝王篇」から。人間には七つの穴があつてこれで見たり聞いたりしているけれど、渾沌にはそれがない。そこで毎日ひとつずつ渾沌の身体に穴をあけていったものの、七日目になると渾沌は死んでしまったという話。

◎渾沌を死に至らしめるようなあり方で問うことは、世界をただ分裂させるだけになつてしまう。主客の対立的なあり方のように、永遠や無限が失われ、いわば奥行きに隠されて見えなくされてしまうことになる。分裂的な問い、つまりはミクロの方向に向かつて物質の根源を解明しようとしたり、マクロの方向にだけ向かつて宇宙を無限に拡大して見ようとしたり、はたまたビッグバンの視点へと向かったりする仕方での問いは、世界の謎も、わたしという謎も迷宮入りしてしまふことになるのではないか。

◎すべては、問うことにはじまり、問うことに終わる。答えを求め、それを教えてもらおうとしても、おそらくはどこにも行けない。ただのルーティン的な機械のようになるだけ。答えは問うことのなかにしかないのだから。ただ単に問題意識をもつべきだというのではなく、世界創造そのものがおそらくは「問うこと」そのものにあるのではないかということ。謎のように世界が現れ、わたしも謎のようにここにいること、それそのものの奥行きのなかにすべての問いが内包され、その問いからあらゆる創造が現出しているのではないかということ。

《同期》

光を明滅させるホタルのように

邯鄲のハーモニーのように

同期する

どきどき

自分が自分を超えるために

みんなのなかの自分になって

同期する

どきどき

どこかで

同期を拒む自分がいる

同期しない

どきどき

遠い未来

進化した蜜蜂たちのようになって

みんなと同期できればいいのだろうけれど

いまはまだ

自分が自分であることも

自分が自分でないことも

どちらも苦しいから

まだ見ぬ自分が

世界の秘密の花から集めてくるだろう

秘密を探して歩くことにする

蜜蜂にはなれないけれど

秘密の花と同期する

どきどき

## ☆風遊戯《同期》ノート

◎「同期」のテーマは、蔵本由紀『非線形科学 同期する世界』（集英社新書 2014/5/16）から。何万匹ものホタルが同時に明滅するなど、世界各地の「同期」の興味深い話からいろいろ思うところを。ちなみに、アマガエルはホタルのような同期はしないで、メスの気を引く？ためにほかのオスとはわざと逆に鳴くそうだ（反同期）が、これも「あまのじゃく」的な「同期」なんだろうと思う。

◎ちなみに、「邯鄲」というのは美しい鳴き声のコオロギの和名。『邯鄲の枕』という物語が伝わってから名前がつけられたとのこと。中国では天蛉と呼ばれている。

◎人間の場合も、白か黒、賛成か反対かなど、同期と反同期が大勢を占めるけれど、どちらもあまり好きじゃなかったりもする。ぼくは多くの場合、捻れの位置にあつて、白でも黒でも灰色でもなくて、別の場所にいることを選びたがるところがある。社会的でも反社会的でも非社会的でもないというところ。

◎シュタイナーの宇宙進化論でいえば、蜜蜂のようなあり方はとても進んだ意識状態を成しているというけれど、人間がそれを達成するのは、ずっと遠い惑星期だと思います。もちろん、そのときの集合的な意識状態になるためには、現在のような自我的なあり方を通して、自由においてそうした状態となるのだろうと思う。

◎秘密の花をずっと探しているのかもしれない。そして、自分はその花の蜜を集める蜜蜂のようだったらいいな。自分はまだそういう蜜蜂ではないけれど、まだ見ぬ未来の自分のことを想像しながら、ぼくは自分が自分であることや、自分が自分でないことを苦しみながら、そんな秘密の花の蜜のことを思う。

◎先日、yuccaの実家の裏に日本蜜蜂が巣をつくっていたのがわかった。スズメバチやアシナガバチだったら仕方ないけれど、日本蜜蜂は駆除したくはない。とはいえ、そのまましておくわけにもいかないのでも、「NPO 法人日本蜜蜂大学」の植平さんという方にお願ひして、「出張捕獲」をしてもらうことになった。なんと3万匹もいたらしい。捕獲してもらった日本蜜蜂たちは森に放つてもらえるという。副産物として、巣蜜を得ることができた。たいそう美味。

<http://www.nihon38.com/>

《ぼやき》

いのちも軽くなったもんさ  
生きていればそれでいいというのだから

言葉も偉くなったもんさ

沈黙なんか相手にしなくなるくらいに

笑いも小心になったもんさ

弱者を傷つけないかとびくびくしてさ

物もものものしくなったもんさ

見えないものなんか存在しない時代になってさ

知恵も紐付きになったもんさ

いまじゃ科学の太鼓持ちのようさ

愛も世知辛くなったもんさ

無私なんて無視されてしまつてさ

自由も臆病になったもんさ

檻のなかにおいて安心したがるほどに

時間も生真面目になったもんさ

真つ直ぐばかりで永遠をなくしちまうほどに

## ☆風遊戯《ぼやき》ノート

◎今回はちょっと息抜きヴァージョンの「風遊戯」として、すこしばかりぼやいてみました。

◎現代という時代は、あらゆるものが過剰に管理される時代だともいえます。健康やらケアやらまでが、世の中の「基準値」のようなものに基づいてそれに照らされ、管理されてしまうような。

◎目に見えないもの、科学的に検証できないもの、お金に換算できないもの、外から基準を与えられないもの……。そうしたすべてが無意味なもの、考えるに値しないものになってしまいう傾向にさえありません。それはまさに、世界の「奥行き」や「永遠」を失ってしまっているということでもあります。

◎イリイチに、有名な医療批判や教育批判がありますが、そのように現代はますますひとの「自律」が奪われ、「他律」的になってきている時代だといえます。外から教えてもらわないと自分で考えることのできない状態である「他律」。

◎医療でいえば、大切な「苦しむ」機会さえが奪われ、「健康」が数値化され、教育でいえば、正しいとされる答えを求めることが受験的な世界のなかで求められ、迷いながら問うことの価値がおざなりにされてしまいます。そして、そうした他律的な管理のしやすいところばかりが肥大して、自律的な部分があります小さくなってしまふ。そして自律を怖がる、つまりは「自由」への不安ばかりが大きくなる。そして「自由」は取り違えられ、お金のようなものをお金にする、とかいうことだけが価値づけられてしまふ。

◎ある意味で、王子様がカエルに変えられてしまっているのに、それにさえ気づけないでいる状態。それは、ほんらい目に見えない「もの」が物質化されて目に見えるかのようになっている状態であるともいえます。カエルが王子様に戻るために必要なのは、自分がいまカエルであるということに気づくということが必要なのは、自分です。今回は、そうしたことに気づき、呪縛状態から解放されるための「ぼやき」ということ……。。

《往還》

ただいま

名づけられぬものが

おかえり

名づけられぬものへ

ただいま

おかえり

永遠から永遠へ

いってきます

名づけられぬものが

いってらっしゃい

名づけられぬものへ

いってきます

いってらっしゃい

永遠から永遠へ

つかのまの

わたしという

旅のために

☆風遊戯《往還》ノート

◎「名づけられぬもの」というのは、死者でもあるし、わたしたちがいまは思い出せないでいる魂のふるさとでもある。それは、物質的に顕現している世界の垂直軸、奥行きに広がっている靈性の世界でもあり、純粹直観、純粹思考などがそこからできてくる「無の場所」でもある。

◎ベケットの描いている「名づけえぬもの」では、沈黙をおそれて、沈黙してしまえば死んでしまうのではないかと、登場人物たちは語り続けるのだけれど、結局のところ、何も残らない。モロイ、モフン、マロウン、マフード、マーフィー……。そういう否定的なところの濃厚な無常観に、ひとは置き去りにされてしまうところからはじめなければならぬところもあるのではないかと思う。そうでないか、「個」という器がこのつかのまの世界のなかでしっかりとつくられ、焼かれすることはできないだろうから。しかし、そこで終わってしまえば、自殺のすすめ、空虚のすすめにしかない。ひとはそれを耐えることしかなさずべはない。

◎親鸞を読んでいると、ニヒリズムなのか信仰なのかというすれすれのところを飛行しているような感じを受けることが多いのだけれど、そのすれすれ感のなかで、つまりは強烈な懐疑のなかでの南無阿弥陀仏というのはむしろ説得力があつたりする。

◎親鸞の思想の根本のところには、往相回向、還相回向の「二種回向」というのがあるが、今回の「往還」はそのイメージから。大海のひとしくとしての私たちは、また大海へと帰り、またこうしてひとしくととして還ってくる。ただ、大海へと融解してしまうのではなく、「名づけられぬもの」が「私」の顔をして、こうして生きているということをおおざりにしてはならない。つかのま、ではあるものの、このつかのまがなければ、世界は生成していかない。

◎旅は永遠から永遠へと続いていく。わたしという名づけられぬものが、つかのま、わたしという顔を現象させている。しかしそのことによって、旅は成立していく。送り出す者も迎える者も、おなじ、名づけられぬ「わたし」という永遠。

《結詞》

遠い道か

近道か

地図はない

はじまりと終わりは

いつのまにか

つながっている

夢なのか

現なのか

夢のまた夢

したいことをする

だれもしてなくても

気にしない

さかさまのこともしない

心の生んだ熱を

ひとり育てる

ひとり旅でも

だれと旅していても

歩くのはただひとり

かたちにならなくても

役に立たなくても

かまわない

思いのままに

けれど

勇気だけはなくさないで

意地なんかはらない

だれも見ようともしないものを見る

だれも聴こうともしないものを聴く

素直でいる

したくないことはしない

じぶんのなかのみんなに耳をひらく

偶然なんか信じない

偶然にもまかせない

心の疼きに素直になつて

むりにつながらない

友だちたくさんつくらない

ほんとうはつながっているはずだから

死を恐れない

生きることも恐れない

時のなかを自由に飛ぼうとする

力には負けない

愛には両手を広げ

魂にいつも花を捧げる

名なき者として

名なき者を愛し

名なき者のなかで

遠い道か

近道か

地図はない

はじまりと終わりは  
いつのまにか  
つながっている

## ☆風遊戯《結詞》ノート

◎神秘学ポエジー第3集（今回も全25作）の最後になります。第3集は「永遠の少年」ではじめました。そのはじめには「どんなこともはじめから／ひとつひとつ 新しいまま」と書きました。それを受けて。

◎「結詞」というのは、井上陽水のアルバム『招待状のないショー』（1976）に収められた「枕詞」「結詞」という作品からのタイトル。こんなふうはこの曲ははじまる「浅き夢 淡き恋 遠き道 青き空 今日をか けめぐるも立ち止るも 青き青き空の下の出来事・・・」。

You Tubeから

<http://www.youtube.com/watch?v=eINUD5Wcf00>

◎今日は8月の最後の日ということで、今日の風遊戯のBGMの2曲目として。まだ夏は終わっていないけれど、ついでに多くの好きな曲 矢野顕子の『夏が終る』。これは小室等作曲・谷川俊太郎作詞で、最初、小室等のアルバム『いま生きているということ』に収められていて、そのとき矢野顕子がピアノを弾いていた。矢野顕子のピアノ弾き語りのカバー・アルバム『SUPER FOLK SONG』にも収められている。  
<http://www.youtube.com/watch?v=fcaFZikL1Y>